

アフリカ、ルワンダ共和国で母から娘に代々伝えられるバスケットがある。それがアガセケ (agaseke) で、図 1 のようなとんがった蓋とジグザク模様ガ伝統スタイルである。そして近年、図 1 のバリエーションが数多く作られていて、私はその美しさに注目している。そして背景を探ると、ルワンダでは大変なことが起きていたことを知った。

ルワンダ共和国はアフリカ内陸の小国で、別名「千の丘の国」あるいは「アフリカのスイス」と呼ばれるように平均標高 1,600m の高地が国土をしめている。農地に恵まれ過ごしやすい気候のせいか人口が増加して、人口密度はアフリカで一番であるらしい。人口比率は遊牧系・長身長頭・肌色浅いツチ族 14%、農耕系・短身円頭・肌色濃いフツ族 85%、ピグミー系のツツ族 1%。そして山間部にはマウンテンゴリラも生息している。

ルワンダの王国としての歴史は古く 1350 年に遡り、ツチの王がフツを支配する構造が 500 年以上続き、1889 年からのドイツ統治下でもその構造に変わらなかった。やがてベルギー統治に変わりフツが実効支配するようになった頃から政情不安定になり、1962 年に共和国として独立したときにはアフリカでも最貧国のひとつになっていた。ところが 1966 年から経済再建計画が進められて 1980 年代にはアフリカの模範生といわれるほどに豊かな国となった。この経済再建に尽力した一人の日本人がいる。国際通貨基金よりルワンダ中央銀行に派遣された日銀行員の服部正也氏で、そのときの様子を『ルワンダ中央銀行総裁日記』(中公新書) という本にまとめられた。こんな日本人がいたことを知ることで、遠いルワンダが近くなるようで嬉しい。就任時期が 1965 年～1971 年までの 6 年間ながら、本書後半にツチ蜂起やコンゴ叛乱などの不穏な動きの言及が少しあり、その後を予兆していたかのようでもある。

そして 1994 年、ルワンダ国内で 100 日間にフツ族が 100 万人のツチ族を殺すという、ナチスのような歴史に残るジェノサイド (大量虐殺) が起きた。そのときに狭いトイレに 8 人で 3 ヶ月間も身をひそめて奇跡的に助かった女性の一人がツチのイマキュレー・イリバザギさんで、これまた『生かされて。』(PHP 文庫) という本を出した。高い知性とあつい信仰心 (カトリック) を持ち合わせたイマキュレーさんが窮地に陥る度にイエスがあらわれて、それで救われたという内容で読むものを感動させる。イマキュレーさんによると、平常時はツチとかフツとかを意識することなく平和であったらしい。それが悪魔が心を支配すると対立するようになるのだと。実際にはツチとフツ間での婚姻も多く、ツチ同士、フツ同士にも内部対立があつて、そこで暮らす感覚は外部からはわかりようもない。

さて話をアガセケに戻すと、もとはツチの伝統品で卵・豆・肉などの貴重な食品を入れたり、結婚式のときに結婚祝いとして贈られるものであった。それがジェノサイド後の大量失業の最中で、このアガセケの美しさが外貨を稼ぐ工芸品として再認識され、特に女性にとっては貴重な生計手段となり協同組合が発足した。ここにおいてツチの女性もフツの女性も一緒に生産に携わる「平和のかご」が誕生した。デザインのバリエーションも豊富になり、おもにフェアトレード商品として流通している。いくつかのサイトをみると、どれも美しく迷うところだが、私としてはやはり新しいルワンダ国章にも描かれている図 1 のデザインが欲しい。



図 1. 伝統的なアガセケ

<http://bellesimagesdafrique.com/2018/11/11/a-la-decouverte-des-paniers-agaseke-au-rwanda/>



図 2. デザイン・バリエーション



図 3. アガセケを頭上のにせる女性 (花嫁?)